

第4節 近畿地方における金山産サヌカイトの利用について

山添村教育委員会

田部剛士

1 はじめに

近年、蛍光X線分析手法の開発・発展にともなって特定の石器石材の産地が同定できるようになり、その分析資料の報告例も増加してきた。その結果、これまで近畿地方においてサヌカイトとして扱ってきた資料の中に、二上山産サヌカイトの他にも香川県坂出市で産出する金山産のサヌカイトが含まれていることが明らかとなってきた。金山産サヌカイトを産出する金山は比較的新しく発見された産出地であり、金山産サヌカイト自体についても、これまでに考古学的な検討を加えられることが少なかった。これまでの研究成果によると、金山産サヌカイトは瀬戸内地域を中心として分布し、その利用開始時期は少なくとも縄文時代早期前半に遡るが、その主体となる時期については縄文時代後期以降であることが明らかにされている(竹広 1988・1993・2000)。また、その流通に関しては、いわゆる板状石材(板材)の形態で移動していることが指摘され(竹広前掲、谷若 1997)、その状況が解明されつつある。しかしながら、これらの研究は主に瀬戸内から山陰地方にかけてを対象として分析されており、近畿地方の様相については全く検討されていない。そこで本稿では、主に蛍光X線分析の結果を援用しつつ、特に金山産サヌカイトの近畿地方への流通開始時期を中心に検討したい。

2 近畿地方における蛍光X線分析資料

近畿地方において時期がある程度限定され、かつまとまった点数の蛍光X線分析を実施している例は少なく、筆者の管見による限り16遺跡を確認したにすぎない(図140 表101)。大阪府や滋賀県、兵庫県の遺跡において多く報告されている。最も古い時期の分析例が早期前半の押型文期である奈良県大川遺跡や大阪府神並遺跡であり、その他に古い時期の分析例はほとんどないのが現状である。大部分の資料が後期以降の資料であり、前期～中期にかけての分析例は皆無といえる状況である。

また、兵庫県下の遺跡において前期前半頃から金山産サヌカイトや淡路島北部で産出する岩屋産サヌカイトが利用されていることが窺え、一見して後述するその他の近畿地方の遺跡における石材利用のあり方とは大きく異なる様相を示している。よって本稿では、兵庫県の本州部の資料は除き、原産地である金山から東進する過程で通過したであろう、淡路島や大阪府、滋賀県の遺跡における資料を用いながら大阪湾以東の地域における金山産サヌカイトのあり方について考察したい。

(1) 奈良県大川遺跡

早期前半の押型文期(大川式～神宮寺式)の資料12点の蛍光X線分析をおこなっている(藁科・東村 1989)。これらは全て石鏃を対象としておこなったものであり、製品類の分析例として非常に貴重な情報を提示してくれている。その結果、1点はサヌカイト以外の石材であり、残りの11点中10点が二上山産サヌカイトと同定されている。また、二上山産サヌカイトと同定されなかった1点は産地を特定するまでには至らないが、元素組成の上では二上山産サヌカイトのものと近似するという。

(2) 大阪府神並遺跡

第2次調査において出土した、早期前半の押型文期(神宮寺式～神並上層式)の資料80点の蛍光X線分析をおこなっている(藁科・東村 1987)。これらは全て石片(剝片か?)であり、製品の分析はおこなわ

れていない。その結果、80点中53点が二上山産サスカイトと判定されている。また、残りの27点については二上山地域の原石と元素組成が最も似ているが、二上山産サスカイトととの特定までは至っていないようである。これら二上山産サスカイトと同定されなかった資料は、極めて風化が進行していたため十分に風化層が取り除けなかったためか、あるいは二上山地域に若干元素組成が異なる原石が存在していた可能性が考えられるという。また、産地分析をおこなった資料の中には、二上山以外の原産地の石材が使用された様子は認められなかったという。

(3) 大阪府仏並遺跡

仏並遺跡においては中期末から後期前葉の北白川上層2式にかけての資料76点の蛍光X線分析をおこなっている(薬科・東村 1988a)。その詳細は、中期末の資料が7点、後期初頭の福田KⅡ式が9点、後期前葉の北白川上層1式31点、北白川上層2式29点である。これら76点は全て石片(剥片か?)である。

中期末の資料は7点中6点が二上山産サスカイトと同定されており、残りの1点が産地不明である。後期初頭の福田KⅡ式に帰属する資料についても、9点中8点が二上山産サスカイトであり、残りの1点が産地不明である。後期前葉の北白川上層1式期の資料では31点中26点が二上山産サスカイトであり、残りの5点が産地不明で、北白川上層2式では29点中26点が二上山産サスカイトであり、3点が産地不明という結果が出されている。

(4) 大阪府芥川遺跡

後期前葉、四ッ池・広瀬土坑40段階～北白川上層1式に帰属する11点の資料の蛍光X線分析を行って

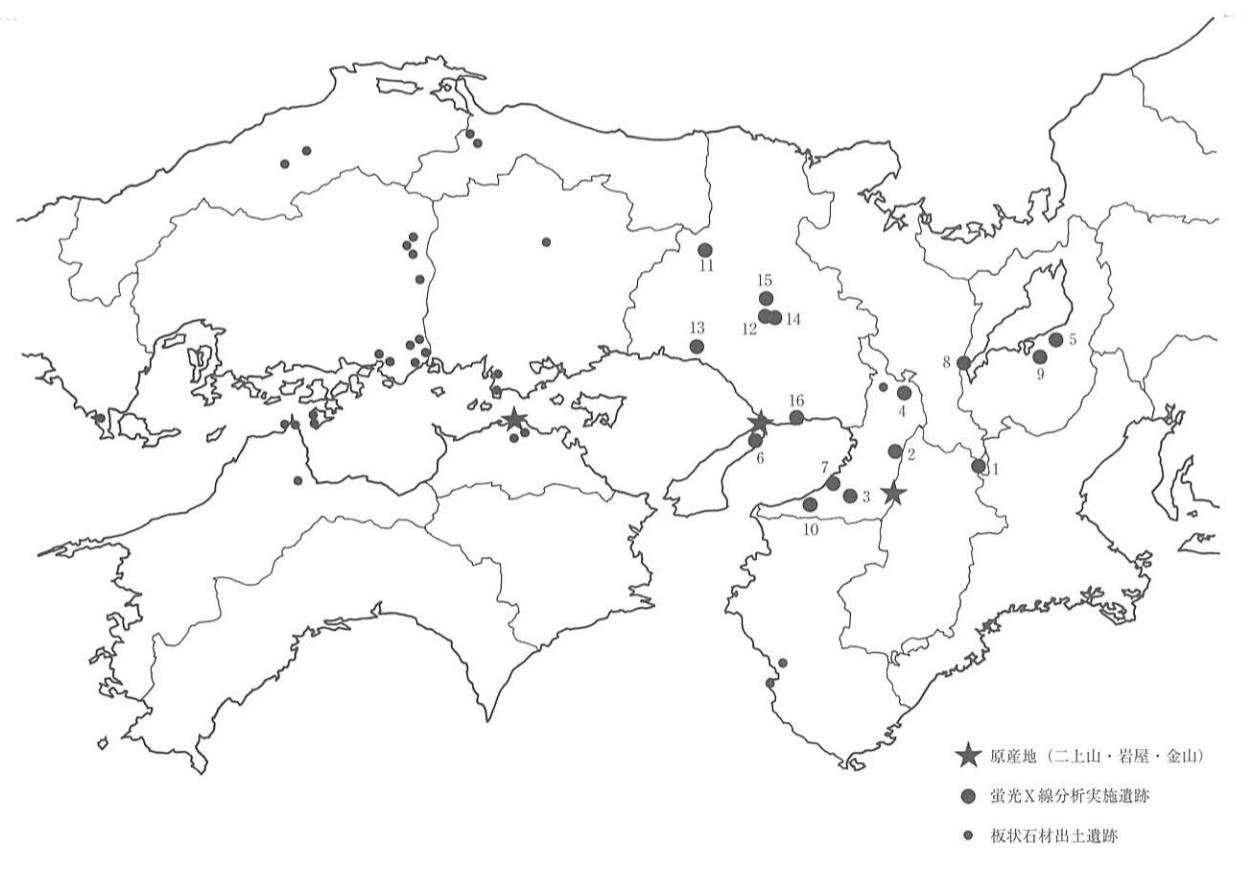


図140 蛍光X線分析実施遺跡及び板状石材出土遺跡の分布

いる(藁科・東村 1995)。これらの資料は剝片7点と同時に石鎌4点が分析されており、数少ない貴重な製品類の分析例である。11点中産地不明の1点を除き、全てが二上山産サヌカイトと同定されている。

(5)滋賀県小川原遺跡

縄文時代後期前葉、北白川上層2～3式に帰属する103点の資料の蛍光X線分析をおこなっている(藁科・東村 1996)。これらの資料は何れも石核や剝片及び碎片であり、製品の分析はおこなわれていない。その結果、3点がサヌカイトではないと判定されている他は、100点中92点が二上山産サヌカイトと同定されている。また、二上山産と同定されなかった残りの8点は産地を特定するまでには至っていない。

(6)兵庫県佃遺跡

佃遺跡においては主に後期、晩期の資料を中心に41点の蛍光X線分析がおこなわれている(藁科 1998)。その詳細は、後期中葉の北白川上層3式～一乗寺K式に帰属する資料が3点、一乗寺K式～元住吉山I式期が7点、後期後半の元住吉山I式～元住吉山II式22点、後期後葉の宮滝式期2点、晩期中葉の突帯文期6点、晩期1点である。これらは後期後半の板状石材1点と晩期の板状石材1点を除く39点が石鎌資料であり、製品の分析例として貴重な情報を提供してくれる。

後期中葉の北白川上層3式～一乗寺K式に帰属する資料は3点あるが、二上山産、金山産、岩屋産がそれぞれ1点であり、一乗寺K式～元住吉山I式期には7点中金山産サヌカイト3点、岩屋産サヌカイト4点が同定されている。後期後半の元住吉山I式～元住吉山II式の段階になると、22点中金山産サヌカイトが16点、岩屋産サヌカイト5点、二上山産サヌカイト1点となり、後葉の宮滝式期では金山産サヌカイトと二上山産サヌカイトが各1点となっている。晩期に入り中葉の突帯文期では6点中6点全てが金山産サヌカイトと同定されている。また、板状石材は2点とも金山産サヌカイトが利用されており、時期に関わりなく金山産サヌカイトが用いられていることは、板状に剥離しやすいという石材の特質を生かしたものとして注目される。

(7)大阪府中之社遺跡

後期中葉の一乗寺K式～元住吉山II式に帰属する44点の資料の蛍光X線分析をおこなっている(藁科 1999)。その結果、44点中28点が二上山産サヌカイトであり、7点が金山産サヌカイト、1点が国分寺産サヌカイトと判定されている。また、残りの8点については産地を特定するまでには至っていないが、一部和歌山県梅原地区で産出するサヌカイトが利用されている可能性が指摘されている。

(8)滋賀県穴太遺跡

縄文時代後期中葉の一乗寺K式～元住吉山II式に帰属する50点の資料の蛍光X線分析をおこなっている(藁科・東村 1996)。これらの資料は全て石核や剝片及び碎片であり、製品の分析はおこなわれていない。その結果、50点中二上山産サヌカイトが29点、金山東産サヌカイトが18点、下呂石1点と同定された。残りは、産地特定まで至らないものが1点、サヌカイトではないもの1点となっている。

(9)滋賀県後川遺跡

後期中葉の元住吉山I式に帰属する56点の資料の蛍光X線分析をおこなっている(藁科・東村 1996)。これらの資料は全て剝片であり、製品類の分析はおこなわれていない。この結果、56点中二上山産サヌカイト35点、金山産サヌカイト19点、下呂石1点と判定されている。残りの1点については産地特定まで至っていない。

(10)大阪府向出遺跡

向出遺跡においては後期後葉、宮滝2式に帰属する土坑806や土坑1293、滋賀里I式に帰属する土坑

1091、晚期後葉口酒井式に帰属する土坑804の資料60点について蛍光X線分析がおこなわれている(藁科 2000)。これらの資料はいずれも剥片類であり、製品の分析はなされていない。

後期後葉の宮滝2式古段階に帰属する土坑806の資料は、10点中二上山産サヌカイト6点、金山産サヌカイト3点、下呂石1点と判定されている。宮滝2式新段階の土坑1293は、10点中二上山産サヌカイト9点、産地不明1点が同定されており、続く滋賀里I式の土坑1091では13点中二上山産サヌカイトが9点、金山産サヌカイトが4点である。晚期後葉の口酒井式に帰属する土坑804では、20点中二上山産サヌカイトが13点、金山産サヌカイトが6点、産地不明が1点となっている。

3 萤光X線分析からみた近畿地方の利用石材

先に述べた16遺跡において蛍光X線分析をおこなった資料を、可能な限り土器型式に基づいてその割合を示したものが図141である。現状で最も古い時期ものは早期前半の押型文期の大川遺跡例(大川式～神宮寺式)及び神並遺跡例(神宮寺式～神並上層式)であり、これを見ると二上山産サヌカイトが7割近くを占めている。さらに、産地同定できなかった資料についても元素組成が二上山産サヌカイトに最も近似することから、二上山産である可能性が極めて高いという。このように考えると、早期前半においては全て二上山産サヌカイトを利用し、金山産のサヌカイトの利用は認められない。

早期後半の滋賀県磯山城遺跡の分析例は点数が少ないので表101からは省略したが、二上山産サヌカイトとともに隠岐久美産の黒曜石が同定されており(藁科・東村 1986)、今後注意すべき現象といえる。その後は前期から中期に至るまでの分析例はほとんどなく、中期末～後期初頭の仏並遺跡の資料が次にまとまって分析されている資料である。近畿地方において、縄文時代後期以降の分析例は比較的まとまっており、以下から土器型式に基づいて石器石材の推移を検討していきたい。

中期末～福田KⅡ式の仏並遺跡例においては、産地不明のサヌカイトを除くと全てが二上山産サヌカイトとなっており、金山産サヌカイトの利用は認められない。補足であるが、同じ中期末の滋賀県筑摩佃遺跡において円礫の下呂石が出土しており、その後においても小川原遺跡や穴太遺跡、向出遺跡などで下呂石が出土している。向出遺跡例は後期後葉の宮滝式期の資料であり、これが筆者の管見による限り下呂石の分布圏の西限である。

続く、後期前葉の四ッ池・広瀬土坑40段階～北白川上層1式期の芥川遺跡例では、二上山産サヌカイトが8割以上を占め、その他の石材も産地不明なもののみであり、金山産サヌカイトが利用された様子は窺えない。それは仏並遺跡や小川原遺跡などの北白川上層式期になども変わることなく、二上山産サヌカイトが9割近くの圧倒的大多数を占めており、未だ金山産サヌカイトの利用は一切認められていない。

しかし、一乗寺K式～元住吉山Ⅱ式期の小川原遺跡や穴太遺跡、中之社遺跡例では、これまで二上山産サヌカイトのみで占められていたが、初めて金山産サヌカイトの利用が認められるようになる。割合的に見ると二上山産サヌカイトが5割強で、金山産サヌカイトが3割を越えて同定されている。ただし、これらの分析結果は蛍光X線分析をおこなうために抽出された資料のみの点数であり、それ自身が全体の割合や供給量を繁栄しているのではないことは言うまでもない。しかし、後述するようにこの時期に比定される板状石材の存在などから考えても、金山産サヌカイトは少なくとも元住吉山Ⅰ式期には近畿地方にある程度安定した供給量を持って流通し始めていたと考えることができる。以上のように、近畿地方における金山産サヌカイトの利用開始時期は、少なくとも元住吉山Ⅰ式に遡ることは明らかであり、

表101 蛍光X線分析による石器石材の産地同定結果

番号	遺跡名	遺構・層位	時期	サヌカイト						下呂石	黒曜石 久美	産地 不明	合計	備考
				二上山	金山	岩屋	法印谷	五色台	国分寺					
1	大川	堅1・堅2・第3層	大川～神宮寺	11	0	0	0	0	0	0	0	1	12	
2	神並		早期(押型文)	53	0	0	0	0	0	0	0	27	80	
3	仏並		中期末	6	0	0	0	0	0	0	0	1	7	
3	仏並		福田K II	8	0	0	0	0	0	0	0	1	9	
4	芥川		四ツ池・広瀬土坑40段階～北白川上層1	10	0	0	0	0	0	0	0	1	11	
3	仏並		北白川上層1	26	0	0	0	0	0	0	0	5	31	
3	仏並		北白川上層2	26	0	0	0	0	0	0	0	3	29	
5	小川原3		北白川上層2～3	92	0	0	0	0	0	0	0	11	103	
6	佃	F・G層	北白川上層3～一乗寺K	1	1	1	0	0	0	0	0	0	3	
6	佃	E層	一乗寺K～元住吉山I	0	3	4	0	0	0	0	0	0	7	
7	中之社		一乗寺K～元住吉山II	28	7	0	0	0	1	0	0	8	44	
8	穴太		一乗寺K～元住吉山II	29	18	0	0	0	0	1	0	2	50	
6	佃	D層	元住吉山I～II	1	16	5	0	0	0	0	0	0	22	
9	後川		元住吉山I	35	19	0	0	0	0	1	0	1	56	
10	向出	土坑806	宮瀧2(古?)	6	3	0	0	0	0	1	0	0	10	
10	向出	土坑1293	宮瀧2(新?)	9	0	0	0	0	0	0	0	1	10	
6	佃	B層	宮瀧	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2	
10	向出	土坑1091	滋賀里I	9	4	0	0	0	0	0	0	0	13	
6	佃	A層	晩期中葉(突帯文)	0	7	0	0	0	0	0	0	0	7	
10	向出	土坑804	口酒井	13	6	0	0	0	0	0	0	1	20	
11	皆木神田		前期前半	0	(1)	(1)	0	0	0	0	4	2	7	1点は金山or岩屋
12	曾我井・野入		北白川下層IIb	7	2	3	0	0	0	0	0	3	15	
13	丁・柳ヶ瀬		中期末～後期	0	7	(1)	0	(1)	0	0	0	0	8	1点は金山or法印谷
14	貝野前		後期前半	1	3	0	0	0	0	0	0	0	4	
15	市原・寺ノ下		滋賀里IIIb	8	122	1	1	1	0	0	1	1	135	
14	貝野前		晩期中葉	0	10	0	0	0	0	0	0	0	10	
16	大開	SX601	晩期後半	8	2	3	0	0	0	0	0	2	15	
16	大開	SK601	晩期後半	2	0	7	0	0	0	0	0	5	14	
16	大開	その他	晩期後半	6	11	9	0	0	0	0	0	2	28	

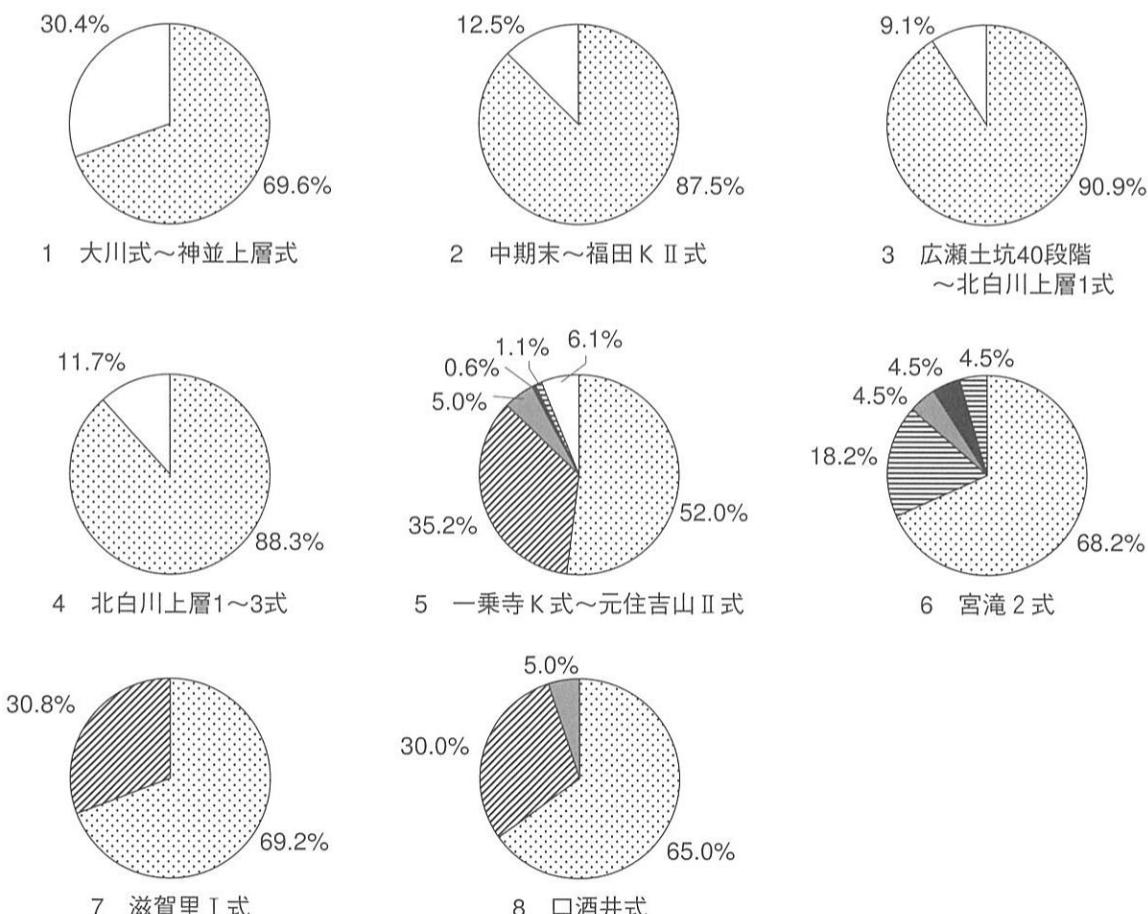


図141 蛍光X線分析結果による時期ごとの石材組成

現在のところ一乗寺K式～元住吉山I式の間を考えておきたい。

その後の宮滝2式以降においても、二上山産サヌカイトと共に金山産サヌカイトの両者が認められる。ただし、宮滝2式期においては金山産サヌカイトが18.2%となっており、他の時期と比して全体的にやや減少していることが指摘できる。しかし、滋賀里I式期になると再び金山産サヌカイトが30.8%と回復し、それ以後晩期の口酒井式に至るまでほぼ同様の傾向が続くこととなる。

以上概観してきたように、縄文時代後期以降の分析資料はある程度まとまっており、石器石材の変遷を比較的追うことが可能である。近畿地方の縄文時代の石器石材は、早期前半以降から後期前葉の北白川上層式期に至るまでは二上山産サヌカイトが専的に利用されているが、後期中葉の一乗寺K式～元住吉山I式期になると金山産サヌカイトの利用が目立つようになる。そして、それ以降は弥生時代に至るまで二上山産サヌカイトが主体を占めつつも、金山産サヌカイトが併用されるという様相が窺える。

4 近畿地方出土の金山産サヌカイト製板状石材

ここまで、金山産サヌカイトが近畿地方へ流通開始する時期が後期中葉、一乗寺K式～元住吉山I式であることを述べてきた。これら金山産サヌカイトは一体どのような形態で近畿地方各地に流通していたのであろうか。これまで、金山産サヌカイトの石材消費過程については詳細な検討がなされており(竹広 1988)、流通する過程において瀬戸内地域の洗谷貝塚をはじめ、中国・四国地方においても板状石材の形態で移動していることが注目されている(竹広 2000・谷若 1996など)。近畿地方において板状石材の出土例が十分あるとは言い難いが、近年の発掘成果からこのような資料が報告されるようになってきているので、ここではそれらの資料についてまとめておきたい。現在のところ、近畿地方における板状石材は5遺跡38点程度の出土例を確認している¹⁾。

(1) 佃遺跡

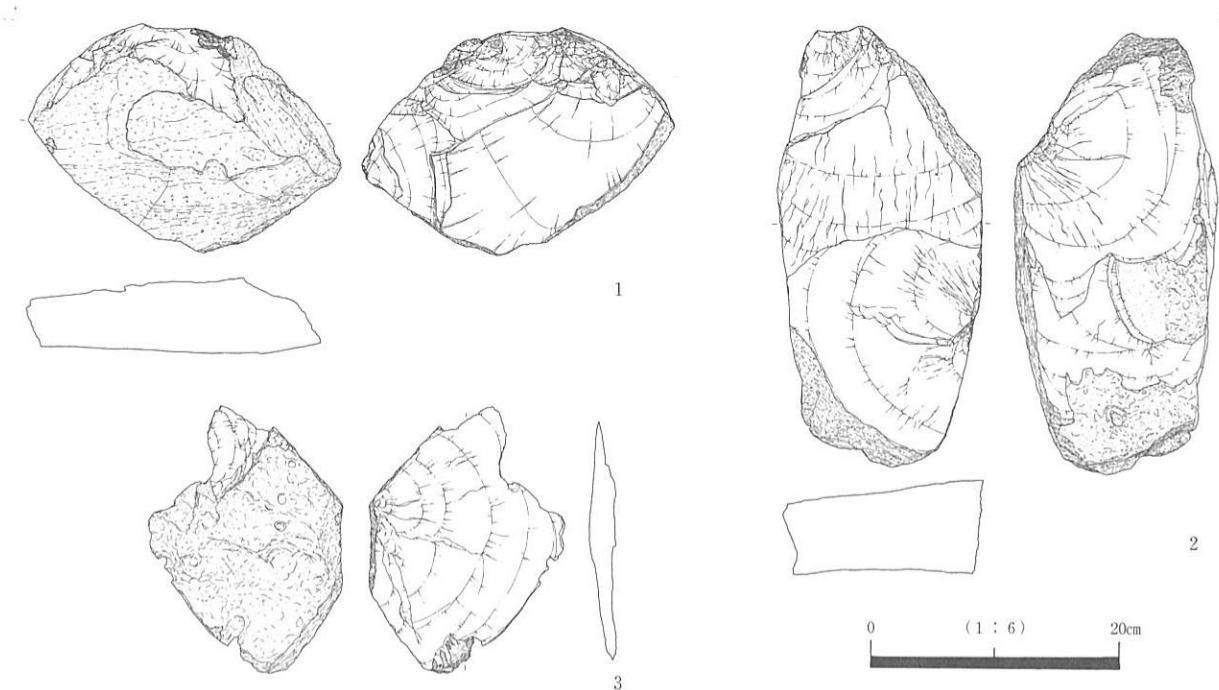
原産地である金山から最も距離の近い遺跡で出土している資料であり、板状石材が集積された状態で2ヶ所検出された。両者とも住居址から約15m程度の所に存在している。一方は後期後半(元住吉山I式～元住吉山II式)の遺構面より検出され、もう一方は晩期(滋賀里IIIa式・篠原式)の土坑内から検出されている。後期集積例では4点のサヌカイト製分割礫が出土しており、その内3点が板状石材となっている(図142-1～3)。また、単独で1点の板状石材が後期集積例の東方約5mのところから出土している(図142-4)。もう一方は晩期集積例であり、土坑内に9点の板状石材が折り重なった状態で検出されている(図143-1～9)。また、単独で1点(図143-10)が出土しており、佃遺跡出土の板状石材は合せて14点ある。

(2) 栗生間谷遺跡

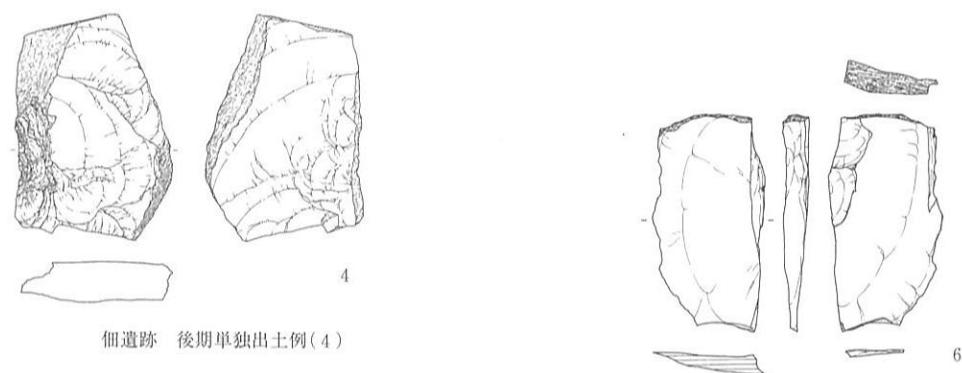
原産地である金山から近畿地方への流通口として、淀川などの河川の影響は大きいものと考えられるが、栗生間谷遺跡は淀川の支流、勝尾寺川の上流域に所在する。周辺に縄文時代の遺構はほとんどなく、住居址などは一切検出されていない。そのような環境において、土坑内から2点の板状石材が集積された状態で出土している(図142-5・6)。共に板状石材を用いた石核であり、6は折損面を打面として少なくとも2枚以上の削片が生産されている。作業面は片面のみに固定されている。7は両面に作業面を設定しているものであり、5枚以上の削片が生産されたことが窺える。

(3) 穴太遺跡

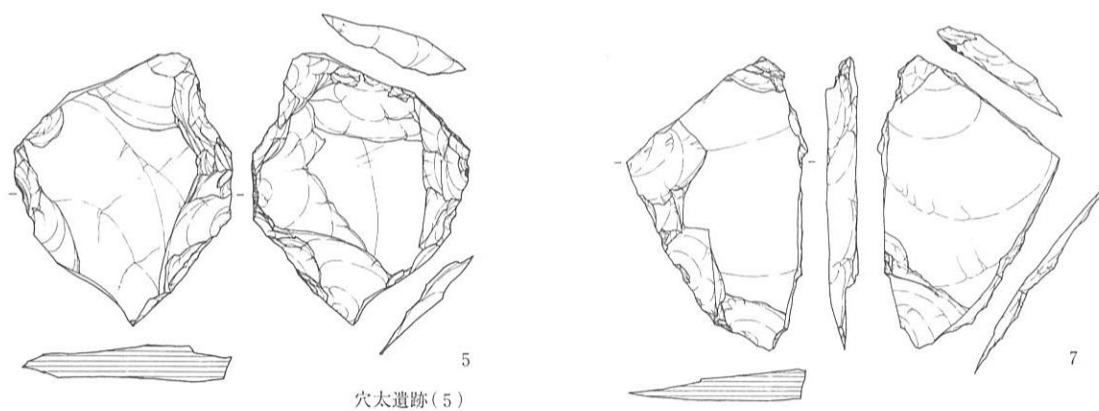
原産地から最も距離の離れた遺跡からの出土例であり、約200km以上離れている。元住吉山I式期の



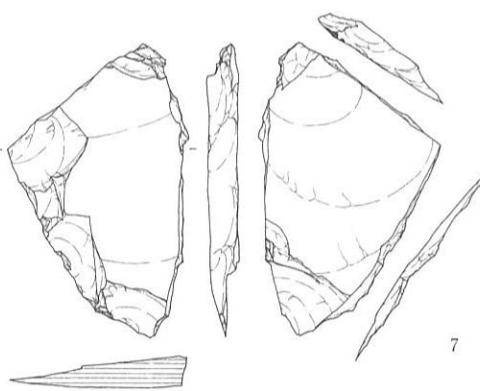
佃遺跡 後期集積例(1~3)



佃遺跡 後期単独出土例(4)



穴太遺跡(5)



粟生間谷遺跡 集積例(6~7)

図142 近畿地方における板状石材 (1)

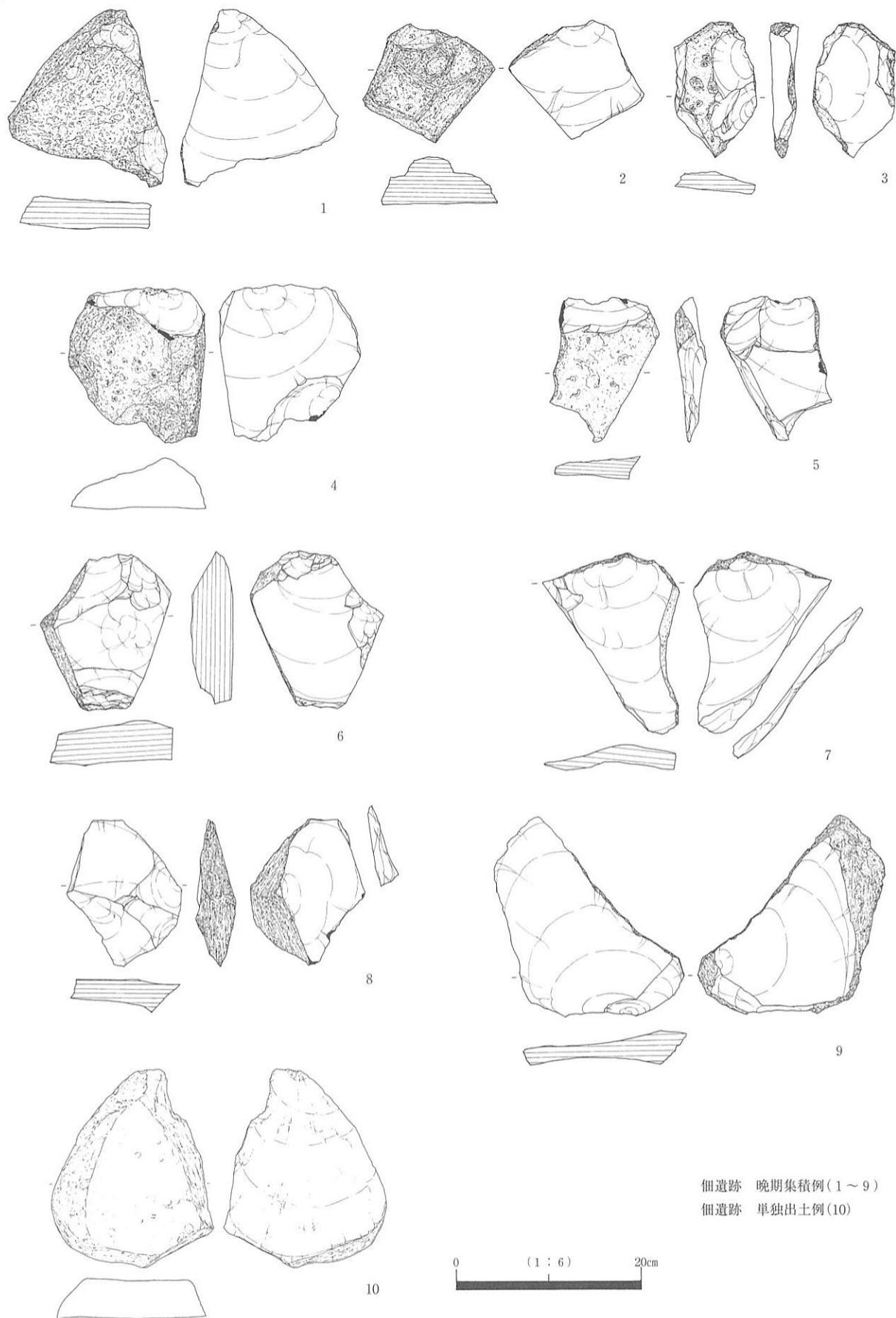


図143 近畿地方における板状石材 (2)

豊穴住居址の床面直上から板状石材 1 点が出土している(図142-5)。両面に作業面を設け、周縁部を打面として多くの剝片を生産している。住居内出土例はこの穴太遺跡のみであり、佃遺跡が住居址に隣接するものの住居外に集積しているのとは異なった出土状況を呈し、注目に値する資料である。

(4)瀬戸遺跡

晩期後半突堤文土器～弥生時代にかけての包含層より板状石材 1 点が単独で出土しているが、図示されていない。筆者が実見する限り、両面に作業面を設け、少なくとも 4 枚以上の剝片が生産された板状石材を素材とした石核である。

(5)徳蔵地区遺跡

中期前半頃の包含層より板状石材 20 点程度がまとまりを持って出土しているという。未報告であるので帰属時期の問題を含め、詳細は報告書の刊行を待って検討したい。

5 近畿地方における金山産サヌカイトの流通

最初に蛍光 X 線分析の結果から見た石材利用のあり方についてまとめたい。近畿地方の早期前半、大川式～神並上層式期の資料には大川遺跡と神並遺跡がある。これらの分析例では石鎌などの製品の分析もおこなわれており大変重要な情報を提供してくれる。これらの遺跡では製品・剝片類共に金山産サヌカイトの利用は一切認められない。また、産地不明の石材においても二上山産のものと元素組成が極めて近似していることなどから、極めて二上山産サヌカイトに依存している様相が窺える。その後の早期後半以降から前期・中期の分析資料は皆無であり、その様相は不明といわざるを得ない。中期末から後期初頭の例が仏並遺跡において分析されているが、この時期になってもまだ金山産サヌカイトの利用は確認されていない。また、芥川遺跡の後期前葉、四ッ池・広瀬土坑 40 段階においても二上山産サヌカイトのみで占められている。これは続く、北白川上層式期においても同様であるが、その後の後期中葉、一乗寺 K 式～元住吉山式の時期になるとその様相が一変し、金山産サヌカイトの利用が認められるようになる。これは佃遺跡や中之社遺跡、穴太遺跡、後川遺跡などの多くの遺跡において剝片類が出土していることから確認される。また、佃遺跡や穴太遺跡では後期中葉の板状石材が出土しており、近畿地方に金山産サヌカイトが流通開始する時期から板状石材の存在が認められ、瀬戸内地域と同様に板状石材の形態で各地に流通していたことが窺える。その後の宮滝式以降の様相は、二上山産サヌカイトと共に金山産サヌカイトの両者が利用されるが、その主体は二上山産サヌカイトであって、金山産サヌカイトが主体的になることは縄文時代を通してないようである。

以上述べてきたことは、蛍光 X 線分析の事例を基にした結論である。分析資料は主に剝片や碎片などを対象としているため、製品の分析はあまりおこなわれないのが現状であるが、少量の製品分析結果からは、早期前半では二上山産サヌカイトのみが利用されており、この時期に金山産サヌカイトが流通していた可能性は極めて低いものと考えられる。しかし、早期後半以降では筆者が実見する限り、滋賀県赤野井湾遺跡や同安土弁天島遺跡などにおいて金山産サヌカイトと考えられるものが出土している。このような資料は比較的石鎌を中心とした製品類に多く認められるが、少なくとも早期後半以降に金山産サヌカイトが利用されていた可能性が考えられる。この問題については、当該期の分析例が皆無であることから確実なことは言えないものの、製品流通の問題を含め、今後注意するべき現象だということを指摘しておきたい。

また、後期中葉の一乗寺 K 式～元住吉山 I 式期になると金山産サヌカイトの利用が確実に認められる

ようになる。一乗寺K式以降、約3割程度の金山産サヌカイトが同定されている傾向にあるが、これは分析のため抽出された資料であることから全体の供給量などの様相を反映しているとはいえない。筆者が実見する限り、原産地からの距離の遠近に関わらず、元住吉山I式～II式期の遺跡においては二上山産サヌカイトと金山産サヌカイトがおおよそ同じ割合で利用され、続く宮滝式期では金山産サヌカイトの出土量が一時的に3割程度まで減少し、その後、晩期の突堤文期に至ると再び増加するという印象を持っている。元住吉山I式～II式の時期にこれまでほとんど利用されていなかった金山産サヌカイトが急激に利用されるようになるわけであるが、この時期以降にこれまで認められなかった板状石材の出土が認められるようになる。このように近畿地方において、元住吉山I式～II式以降に金山産サヌカイトの利用が増加する要因に、板状石材の形態での流通を想定したい。

以上のように、近畿地方の縄文時代における金山産サヌカイトの利用は、早期後半頃から若干の利用が開始されていた可能性があるが、その利用量をみても極めて少量であり、板状石材の形態で各地に流通する主な一乗寺K式～元住吉山I式以降において飛躍的に増加して利用されている石材であることは疑いない。このように、金山産サヌカイトの利用形態が後期中葉以降からは、それまでとは大きく変換したことが窺える。石器石材流通の視点からみて、この一乗寺K式～元住吉山I式期の時期において金山産サヌカイト流通の質的転換が起こり、大きな画期が指摘できるのである。

6 おわりに

これまで述べてきたように、近畿地方に金山産サヌカイトが利用される時期は一部縄文時代早期後半頃まで遡ることが考えられるが、現状では確実なことはいえない。しかし、目立って利用される時期については後期中葉の一乗寺K式～元住吉山I式期であることが解明された。その要因として板状石材の形態での流通を指摘したが、板状石材は穴太遺跡例や佃遺跡例のように住居内や住居址の周辺に集積された状態で検出されることが多く、これらは交換財として各集団あるいは個人において管理されていた可能性が考えられる。また、周辺には住居址などの遺構が全く存在しない場所などにおいて集積された状態で検出される栗生間谷遺跡例なども存在し、これらは狩猟・採集などの生業活動域内に集積貯蔵されていた資料である可能性も考えられる。このように石器石材の集積は、縄文時代の生活の具体像に迫ることが可能な資料であり、これらの問題については今後検出状況や他の遺構との関連性などの視点から検討を試みたい。

以上、後期中葉の一乗寺K式～元住吉山I式期において金山産サヌカイト利用の質的変換が認められ、石器石材の視点から見て大きな変革期であることが指摘できた。しかし、これらの資料はまだまだ数が少なく、分析される資料の多くが剝片や碎片などであることから資料的な制約が大きく、製品との関わりが未だに十分検討された訳ではない。しかしながら、縄文時代における金山産サヌカイトの利用について新たな視点を提供できたことと思う。今後、分析事例の増加を期待するとともに、製品類からの検討が可能になることを期待したい。

本稿をまとめに当たり以下の方々にお世話になった。お名前を記すと共に感謝の意を表したい。

泉 拓良 伊藤栄二 岡田憲一 岡田章一 小島孝修 蔵本晋司 信田真美世 渋谷高秀 新海正博
鈴木康二瀬口眞司 竹広文明 土井孝之 富井 真 野口 淳 森川 実 森先一貴 森屋美佐子
山内基樹 山本 誠 横澤 慶 菅原哲男 (財)大阪府文化財調査研究センター 関西縄文研究会 京

都縄文文化研究会 京都大学埋蔵文化財研究センター (財)滋賀県文化財保護協会 奈良大学先史談話会 兵庫県教育委員会 兵庫県埋蔵文化財調査事務所 (財)和歌山県文化財センター (五十音順・敬称略)

引用・参考文献

- 泉拓良・花谷浩 1982 「和歌山県瀬戸遺跡の第4・5次発掘調査」 『京都大学構内遺跡調査研究年報』 昭和57年 pp.51-63 京都大学埋蔵文化財研究センター
- (財)和歌山県文化財センター 2001 『徳蔵地区遺跡現地説明会資料』
- 渋谷高秀 2002 「和歌山県南部町徳蔵地区遺跡の縄文時代中期・後期集落」 『考古学ジャーナル』 №485 pp.16-19 ニューサイエンス社
- 下村晴文(編) 1987 『神並遺跡II』 東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会
- 竹広文明 1988 「中国地方縄文時代の剝片石器-その組成・剝片剝離技術-」 『考古学研究』 第35巻第1号 pp.61-88 考古学研究会
- 竹広文明 1993 「縄文時代の石器原材獲得-金山産サヌカイトをめぐって-」 『考古論集-潮見浩先生退官記念論文集-』 pp.111-126 潮見浩先生退官記念事業会
- 竹広文明 2000 「山陰における石器石材利用をめぐる二、三の問題」 『島県考古学会誌』 第17号 pp.197-212 島根考古学会誌
- 田中龍男・島崎久恵(編) 1999 『中之社遺跡他発掘調査報告書』 (財)大阪府文化財調査研究センター
- 谷若倫郎 1997 「「瀬戸内の物流」の原形-金山産サヌカイトの移動をめぐって-」 『古文化論叢-伊達先生古稀記念論集-』 pp.40-50 伊達先生古稀記念論集刊行会
- 仲川 靖(編) 1988 『穴太遺跡発掘調査報告書II』 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 中村健二(編) 1996 a 『小川原遺跡3』 滋賀県教育委員会 (財)滋賀県文化財保護協会
- 中村健二(編) 1996 b 『後川遺跡』 滋賀県教育委員会 (財)滋賀県文化財保護協会
- 橋本久和(編) 1995 『芥川遺跡発掘調査報告書』 高槻市教育委員会
- 深井明比古(編) 1998 『佃遺跡』 兵庫県教育委員会
- 松田真一(編) 1989 『大川遺跡』 山添村教育委員会
- 山元建・村上富喜子(編) 2000 『向出遺跡』 (財)大阪府文化財調査研究センター
- 藁科哲男 1997 「加美町市原・寺ノ下、中町曾我井・野入、中町貝野前遺跡出土のサヌカイト・黒曜石製遺物の石材产地分析」 『市原・寺ノ下遺跡』 pp.59-74 兵庫県加美町教育委員会
- 藁科哲男 1998 「佃遺跡出土のサヌカイト製遺物の石材产地分析」 『佃遺跡』 pp.95-104 兵庫県教育委員会
- 藁科哲男 1999 「中之社遺跡出土のサヌカイト製遺物の石材产地分析」 『中之社遺跡他発掘調査報告書』 pp.129-140 (財)大阪府文化財調査研究センター
- 藁科哲男 2000 「向出遺跡出土のサヌカイト製遺物の石材产地分析」 『向出遺跡』 pp.380-387 (財)大阪府文化財調査研究センター
- 藁科哲男 東村武信 1986 「礎山城遺跡出土のサヌカイト、および黒曜石遺物の石材产地分析」 『礎山城遺跡』 pp.205-213 米原町教育委員会
- 藁科哲男・東村武信 1987 「神並遺跡出土のサヌカイト遺物の石材产地分析」 『神並遺跡II』 pp.95-101 東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会
- 藁科哲男・東村武信 1988a 「仏並遺跡出土のサヌカイト製剝片の石材产地分析」 『(財)大阪府埋蔵文化財協会 研究紀要1』 pp.97-110 (財)大阪府埋蔵文化財協会
- 藁科哲男・東村武信 1988 b 「入江内湖遺跡行司地区出土のサヌカイト製石器、剝片の石材产地分析」 『入江内湖遺跡(行司地区)発掘調査報告書』 pp.58-64 米原町教育委員会
- 藁科哲男・東村武信 1989 「大川遺跡出土のサヌカイト遺物の石材产地分析」 『大川遺跡』 pp.241-245 山添村教育委員会
- 藁科哲男・東村武信 1995 「芥川遺跡出土のサヌカイト製遺物の石材产地分析」 『芥川遺跡発掘調査報告書』 pp.227-233 高槻市教育委員会
- 藁科哲男・東村武信 1996 「小川原、穴太、後川遺跡出土のサヌカイト製遺物の石材产地分析」 『小川原遺跡』 pp.224-230 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 藁科哲男・東村武信 1997 「穴太遺跡出土のサヌカイト製遺物の石材产地分析」 『穴太遺跡発掘調査報告書II』 pp.306-316 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

追記

脱稿後、滋賀県安土町弁天島遺跡の発掘調査報告書が刊行された。それによると、サヌカイト8点の中二上山産サヌカイトが1点であり、その他は金山産サヌカイト4点、城山産サヌカイトが1点、国分台産サヌカイト2点と同定されている。これらの資料は全て早期末～前期初頭に帰属するものであり、それらの内肉眼により金山周辺産のサヌカイトと想定されるものを抽出して分析しているという（小島2002 226頁）。この結果から早期末～前期初頭の時期において金山産サヌカイトを中心とした香川県で産出するサヌカイトが利用されていることが明らかである。また、香川県産のサヌカイトと同定されている資料は石匙やスクレイパー、楔形石器などの製品類であり、この時期において香川県産のサヌカイトは、製品類での同定頻度が高い石材であることが改めて確認された。これは製品流通の可能性もあり、今後の資料の増加が期待される。

弁天島遺跡の資料については（財）滋賀県文化財保護協会、小島孝修氏及び奈良大学大学院生、山内基樹氏より御教授を頂いた。感謝したい。

参考文献

小島孝修（編） 2002 『弁天島遺跡』 滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会

註

- 1) 板状石材については佃遺跡の後期例1点、晚期例1点、及び栗生間谷遺跡例2点、穴太遺跡例1点について蛍光X線分析がおこなわれている。これらの分析結果では、いずれも金山産サヌカイトと同定されている。それ他の蛍光X線分析をおこなっていない資料についても、筆者の実見する限り金山産サヌカイトを利用している。
また、京都府石田遺跡や三重県天白遺跡のいとも板状石材と考えられる資料が存在するが、実見していないため今回の対象からは省いている。このように、板状石材は定型的な製品ではないことから、これまで十分注意されていた資料でないため、今後とも資料数が増加することが予想される。